

今から 25 年前の 1 月 17 日、午前 5 時 46 分、淡路島を震源とするマグニチュード 7.3、震度 7 の大地震が淡路島や神戸市などを襲いました。

当時、神戸市は地震のない安全な街と思われており、その安心感からここに引っ越してきた人も大勢いました。しかしあまり知られていなかった活断層があり、大地震が起こったのです。この阪神・淡路大震災では、6,434 人が命を失いました。多くの死は、最初の 5 秒間のうちに起こった建物倒壊による圧死だったと言います。

当時のニュース映像をみてみましょう。実はある民放の生放送中に地震が起こっています。その場面から、地震直後の街の映像を見てみます。

(映像視聴)

神戸市の長田区・兵庫区・東灘区では同時多発的に火災がおこり、倒壊した建物の下敷きになって身動きが取れない人々が焼死しました。地震直後、生き埋めとなったけれども外と会話が出来た人々が、火災の炎が迫ってきたとき、「ありがとう」「早よ逃げ」と家族に最後の言葉をかけたという話が、いたるところに残っています。

ボールペンを握ったまま亡くなった受験前の女子生徒がいます。小さな子どもを妻に放り投げ、「後は頼む」と言い残して家の下敷きになったお父さんがいます。下半身が家の下敷きになり、炎が近づいたとき、「君だけ逃げてくれ」と友人に言って、炎に包まれた男子生徒がいます。

私の親しい友人は、生徒を連れて長野県の黒姫高原にスキー合宿に来ていました。当時は携帯電話がなかった時代です。生徒たちは家族がどうなっているのかまったくわからず、必死の思いでバスに乗って神戸に戻ると、家族全員が亡くなったという生徒、自宅が火災で全焼し帰る家がなくなってしまった生徒、変わり果てた故郷の姿に生徒たちは声を失い、泣いていたと言います。

今日の私からのメッセージは 3 点あります。

その 1。家に帰ったら、自分の部屋、家族の部屋について、寝ている時に家具などにおしつぶされないかを点検しよう。たんすなどがあったら金具で壁に固定するとか、天井との間に転倒防止器具をはめたりしよう。方法は、消防庁のホームページに詳しく図入りで書かれています。東海・東南海・南海地震は今後 40 年の間に必ず起こると予想されています。皆さんは生きている間に必ず大地震を経験するでしょう。自分と自分の家族を守る努力をしてほしいと思います。明日にまわせば、結局何もしなくなります。今日、帰ったら必ず点検をしてほしいです。

その 2。学校で大地震が起こった場合、先生の指示に従い静かに迅速に、壊れた窓ガラスなどにも注意して避難することは言うまでもありませんが、急傾斜の木曾谷では、土砂崩落に気を付けなければなりません。通学路の伊勢小屋沢で昔豪雨による蛇抜け（土石流）があったとき、奥様と子どもを失った太田・読書中学校長は「悲しめる乙女の像」にこういうときに蛇抜けが起こるといふ兆候を刻みました。そのひとつに、ふだんと違う焦げくさい臭いがするという兆候があります。災害被害者の多くの証言が同じことを語っています。目と耳と鼻を使って、危険な兆候を察知しよう。

その 3。阪神・淡路大震災の時、こういうことが起りました。消防士が火災現場にか

けつけると、予想外のことが次々に起こったと言います。まず消火栓から水が出なかった。水を探すと、人に家族が埋まってしまったから助けてくれと頼まれた。火が出ているのとあせりながら、瓦礫をどかした。すると別の人が、うちの家族も助けてくれと言う。次々と頼まれた。あるいは避難所では、限られた食料を配ろうとして、一人一食と言っていたのに、足りなくなった。誰かががまた列に並んで二食とってしまったからです。遺体を収容する棺が足りなくなり、いつまでも床に置かれていた遺体の遺族が、市役所の職員を怒鳴りつける、つかみかかるという光景も見られた。みな、予想もしなかったような地獄を見て、混乱しました。

そのなかで医療活動を行った、中井久夫という有名な精神科医が、のちにこう書いています。「有効なことをなしたものは、すべて、自分でその時点で最良と思う行動を自己の責任において行ったものであった」と。

誰かが指示を出してくれる。誰かが何かをしてくれる。そうやって誰かを待つのではなく、自分で判断して自分から動いた者が、その事態をのりこえたのだということです。阪神・淡路大震災で言えば、消防士はものすごい心の葛藤をふりきり火災の消火活動に向かいました。市役所の職員は自ら棺桶づくりを行いました。混乱した避難所では、住民自らが自治組織を作り、ルールを決め、助け合いを目指しました。

まとめます。①自分の部屋、家族の部屋について、寝ている時に家具などにおしつぶされないかを点検しよう。②目と耳と鼻を使って、危険な兆候を察知しよう。③自分で判断して自分から動いた者こそが、事態をのりこえることができる。

このことを皆さんに今日のメッセージとして伝えます。